



Title	札幌農学校・東北帝国大学農科大学における「文部省外国留学生」の派遣とその背景
Author(s)	山本, 美穂子; YAMAMOTO, Mihoko
Citation	北海道大学大学文書館年報, 18, 17-43
Issue Date	2023-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/89173
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_02.pdf



< 研究ノート >

札幌農学校・東北帝国大学農科大学における「文部省外国留学生」の派遣とその背景

山本 美穂子

はじめに

開拓使が1876年8月開校した札幌農学校は、1882年2月開拓使の廃止後、農商務省（1882年3月～）、北海道庁（1886年1月～）と所管が変わり、1895年4月1日に「文部省直轄学校」となった。札幌農学校は1880年7月に第1期生を卒業させたが、所管が開拓使・農商務省・北海道庁に次々と変わったため、教官在職者や教官候補者を海外に留学させる資金を官費で調達することが困難な状況に陥った。そのような中、札幌農学校が農商務省の官費留学生を認可されたのは1回（①佐藤昌介・荒川重秀）、北海道庁の官費留学生を認可されたのは2回（②宮部金吾・渡瀬庄三郎、③太田〔新渡戸〕稲造・廣井勇）、計6名にとどまる（表1）。1886年12月帰国後に教授に着任した佐藤昌介が、太田・廣井に関する留学上請・期間延期の上請、宮部の帰国旅費増額の上請、渡瀬の留学期間延長の上請など、自身に続く官費留学生の資金調達に奔走した¹⁾。農商務省・北海道庁の官費留学生6名のうち4名（佐藤昌介、宮部金吾、新渡戸稲造、廣井勇）は、帰国後に予定通り札幌農学校の教授として本科の講義を受け持ち、「札幌農学校校則」を1896年6月改正して本科（農学科・工学科）の学科目を改編し、新たに設けた「実科規程」により専門研究分野を明文化して、分野毎に後継者を育成した。

文部省直轄学校となった札幌農学校には、1895年度より、文部省の海外派遣制度である「文部省外国留学生規程」（1892年11月21日制定、勅令第百二号）が適用された。1895年当時、文部省直轄学校には、①帝国大学、②高等師範学校、③女子高等師範学校、④高等学校6校（第一～第五、山口）、⑤東京工業学校、⑥東京美術学校、⑦高等商業学校、⑧東京聾啞学校等があった²⁾。その中で農学分野の高等教育機関は、帝国大学農科大学（後の東京帝国大学農科大学）と札幌農学校の2校であった。札幌農学校が大学昇格した1907年以降、農学分野の高等教育機関は、「文部省外国留学生規程」が「文部省在外研究員規程」（1920年9月14日制定、勅令第三百九十三号）の公布・施行と同時に廃止となった1920年9月までには、①帝国大学2校（東京帝国大学農科大学、東北帝国大学農科大学）、②高等農林学校2校（盛岡、鹿児島）、③蚕糸専門学校1校（上田）、④高等蚕業学校2校（東京・京都）に拡充した。

従来、近代日本における留学史研究は明治期を対象として研究の層が厚いととも、辻

直人『近代日本海外留学の目的変容 文部省留学生の派遣実態について』（東信堂、2010年）では、文部省による海外派遣留学生（「文部省貸費留学生」1875年～、「文部省海外留学生」1882年～、「文部省外国留学生」1892年～、「文部省在外研究員」1920年～）について、1875年から1940年を通して研究分野・所属別の数量分析がなされ、派遣目的の変化を概説した。一方で、高等教育機関1校に焦点をあてて、文部省の海外派遣留学制度の運用の特徴や研究分野毎の特徴・背景を分析した研究は見当たらず、留学生の留学先での具体的な修学先・研究内容、「巡歴旅行」と呼称した施設見学・各地調査については詳らかになっていない。

表1 札幌農学校教官及び教官候補者の官費外国留学状況（1881年度～1894年度）

【官費所管】 発令日	留学条件・身分・義務等	
氏名 (卒業期・卒業年)	留学認可期間	
	研究目的	留学先(国)
【農商務省】 1883年12月	農商務省御用係に採用の上、2ヶ年米国滞留認可、年600ドル迄支給、帰国後は札幌農学校に奉職義務	
佐藤昌介 (1期生・1880年卒業)	(私費渡米後)1884年2月～1886年12月帰国(6ヶ月延期)	
	農学研究	ジョンズ・ホプキンス大学(米)
荒川重秀 (1期生・1880年卒業)	(私費渡米後)1884年2月～	
	農学研究→社会学・法学研究	ミシガン大学、カムバランド大学(米)
【北海道庁】 1886年7月	札幌農学校助教を依願免官の上で、3ヶ年米国留学認可、月銀貨70ドル迄支給、帰国後は札幌農学校に奉職義務	
宮部金吾 (2期生・1881年卒業)	1886年9月出国～1889年10月帰国	
	植物学研究	ハーバード大学(米)
渡瀬庄三郎 (4期生・1884年卒業)	1886年出国～1899年8月帰国	
	動物学研究(特に虫学)	ジョンズ・ホプキンス大学(米)
【北海道庁】 1887年3月	札幌農学校助教に採用の上、3ヶ年独逸国留学認可、月俸75円・旅費を支給、帰国後は札幌農学校に奉職義務	
太田稻造(新渡戸) (2期生・1881年卒業)	(私費渡米後)1887年3月～1891年2月帰国(1ヶ年延期)	
	農業経済学・農業統計学研究	ボン大学、ベルリン大学、ハレ大学(独)
廣井勇 (2期生・1881年卒業)	(私費渡米後)1887年3月～1889年7月帰国	
	土木工学・物理学・数学研究	カールスルーエ工科大学、シュツットガルト工科大学(独)

注)『北大百年史』の札幌農学校(一)・1981年・664-665・764頁、札幌農学校(二)・1981年・4-5・11-12・51-52・111-112・188頁より作成し、「退職者履歴資料」(北海道大学大学文書館所蔵)及び『札幌同窓会報告』(第51回、第53回)等より補った。

本稿では、まず「文部省外国留学生規程」の制定・改正内容を概括し、札幌農学校・東北帝国大学農科大学が、「文部省外国留学生」制度をどのように運用したのかを、文部省直轄学校となった1895年4月から、「文部省在学研究員」制度に変わる1920年9月までを対象時期として、文部省外国留学生の一覧(氏名・派遣発令年度・研究学科・留学国・期

間等）を作成して、研究専門分野毎に派遣の目的・背景・特徴等を考察する。

1. 札幌農学校・東北帝国大学農科大学における「文部省外国留学生」の派遣人員数の変化とその特徴

1-1. 「文部省外国留学生規程」の制定と改正

「文部省外国留学生規程」（1892年11月21日制定、勅令第百二号）の条文を確認すると、次のとおりである³⁾。「文部省外国留学生」は、文部省直轄学校の卒業生または教官より文部大臣が指定（第一条）、人員は同時に22名を超えない（第二条）、専修学科・留学国・留学年限等は文部大臣が指定（第三条）、学資金は年180ポンド以内・旅費は「外国旅費規則」に依る最下額を支給（第四条）、文部省直轄学校教官の俸給は出国から帰国まで不支給（ただし、時宜により俸給3分の1以内を支給）（第五条）、帰国後は留学年数の2倍に当たる期間は文部大臣の指定する職務に奉職する（第六条）と規定した。

文部省外国留学生規程

第一条 文部省外国留学生ハ文部大臣ニ於テ特ニ須要ノ學術技芸ヲ研究セシメンカ為ニ文部省直轄学校卒業ノ者又ハ文部省直轄学校教官ノ中ヨリ選抜差遣スルモノトス

第二条 文部省外国留学生ノ人員ハ同時ニ二十二人ヲ超エサルモノトス

第三条 文部省外国留学生ノ専修スヘキ学科留学スヘキ邦国及留学年限等ハ文部大臣之ヲ指定ス

第四条 文部省外国留学生ニ支給スヘキ学資金ハ一箇年英貨百八拾磅以内トシ旅費ハ外国旅費規則ニ依リ其最下額ヲ支給ス
特別ノ事由アルトキ又ハ各地ヲ巡歴シテ研究セシムルトキハ前項学資金ノ外特ニ相当ノ学資金ヲ増給スルコトヲ得但増額ノ学資金ハ留学中ヲ通シテ英貨百五拾磅ヲ超ユルコトヲ得ス又巡歴研究ノ為学資金ヲ増給スルトキハ別ニ旅費ヲ支給セス

第五条 文部省直轄学校教官ニシテ外国留学ヲ命シタル者ハ本邦発程ノ日ヨリ帰朝ノ日マテ本官ノ俸給ヲ支給セス但時宜ニ依リ特ニ俸給三分ノ一以内ヲ支給スルコトヲ得

第六条 文部省外国留学生ハ帰朝ノ日ヨリ其留学年数ノ二倍ニ当ル期限間ハ文部大臣ノ指定スル職務ヲ辞スルコトヲ得ス

附則

明治二十五年度及二十六年度ニ限り本令第四条第一項ノ学資金ハ銀貨千七拾円以内ヲ支給シ同条第二項ノ場合ニ於テハ銀貨千円ヲ限リトス

その後、「文部省外国留学生規程」は、①1896年3月、②1897年3月、③1898年6月、④1899年5月、⑤1901年3月、⑥1903年3月、⑦1908年4月に改正された後、「文部省在外研究員規程」(1920年9月14日制定、勅令第三百九十三号)の公布・施行と同時に廃止となった(表2)。

表2 「文部省外国留学生規程」の改正(1896年~1908年)

順序	改正年月日(勅令番号)／改正の要旨
1	1896年3月18日改正(勅令第二十九号) 留学生の人員(定員)を22人から35人に改める(第二条)
2	1897年3月23日改正(勅令第四十五号) 留学生の人員(定員)を35人から60人に改める(第二条)
3	1898年6月28日改正(勅令第百三十二号) ・学資金を1ヶ年英貨180ポンドから金1,800円に、増給の学資金を英貨150ポンドから金1,500円に改める(第四条第一項、同条第二項但書中) ・文部省直轄学校教官で外国留学を命じられた者は「当該各学校教官定員ノ外」に置く(第五条中追加)
4	1899年5月16日改正(勅令第二百二号) ・定員を削除(第二条を削除) ・旅費は「雇員」から「判任官」の額での支給に改め、学資金の増給の制限額を撤廃(第四条改正)
5	1901年3月28日改正(勅令第十六号) ・卒業者又は教官の者に対して「検定」を行う、検定は全部または一部を免除できる(第一条中追加) ・卒業者又は教官のほか、文部大臣は「適当ト認ムル者」があるときは検定を行い、特に留学生を命じる事ができる(第一条第二項新設)。俸給の支給は第五条第一項を準用する ・帰国後の奉職は「義務」である(第六条文末変更) ・文部大臣の命令に違背・不都合の行為をした留学生には、支給した学資及び旅費を償還させる。但し特別な事由があるときは償還の一部を免除(第七条新設)
6	1903年3月26日改正(勅令第六十号) ・「学資及旅費」を旅費・支度料・学資に分ける(第三条、第七条文言変更) ・旅費・支度料・学資は、別表「外国留学生旅費支度料学資定額表」により定額支給とする(第三条) ・別表掲記以外の国に留学する者は、学資は年額1,800円以内、往復旅費は「外国旅費規則」により判任官に準じて支給する(第三条ノ二) ・疾病、変災、その他不可避の事由に依り同一国に7日以上超過滞在する際は、超過日数に対して別に旅費を支給する(超過滞在先が清、韓では日額6円、他の外国では日額9円50銭で別に旅費を支給する。但し、船舶中の滞在は対象外)(第三条ノ三) ・研究上各地巡歴、転学、その他特別の事由あるときは、学資の増給として扱う(別に旅費、支度料は支給しない)(第四条) ・支度料、旅費は「前金渡」ができる(第八条)
7	1908年4月8日改正(勅令第八十一号) ・英米2カ国、清国への留学生には年360円以内の学資増額ができる(第三条第一項に追加) ・留学生で、旅費・支度料・学資を支給する必要のない者と認められる場合は、支給を減額することができる(第三条第二項に追加)

注) 国立公文書館所蔵「公文類聚」、「文部省外国留学生規程」掲載の『官報』を参照。

7回にわたる主な改正点は、【1】留学生の人員数、【2】支給金の金額・費目・支払方法、【3】留学者の身分と対象拡大、【4】留学生選考の「検定」の導入、【5】違反者への支給金償還である。

【1】留学生の人員数は、同時に22人を超えないとの規定が現況と合わず、①35人、②60人と増員され、④1899年5月の改正では人員数の制限を設けず、定員が撤廃となった。①1896年3月の改正では、「殊ニ適良ノ教員ヲ得ルコト甚タ難キヲ以テ前途有望ノ人物ヲ海外ニ派遣シ其ノ専攻ノ學術ヲ研究セシムルノ必要ハ益々緊切」（1896年2月28日付内閣総理大臣宛て文部大臣請議書⁴⁾）と改正が請願されており、文部省が留学生として「前途有望ノ人物」を多数派遣したいという意向がうかがえる。②1897年3月の改正では「京都大学其他専門学部ノ創設スルニ付教員其人ヲ得ルコト最難キ」（1897年3月1日付内閣総理大臣宛て文部大臣請議書⁵⁾）と、④1899年5月の改正でも「京都帝国大学ニ於ケル諸学科ノ新設及直轄学校ニ於ケル事業ノ増進ハ益々教官養成ノ必要アルヲ以テ明治三十二年度ニ於テ定員ヲ増加シテ百人トナルヲ要スル」（1899年4月13日付内閣総理大臣宛て文部大臣請議書⁶⁾）と改正が請願されており、1897年6月新設の京都帝国大学の教官候補者の留学人員確保と定員が合わない現況がうかがえる。請議書では100人への増員であったが、「留学生ノ数ハ予算ノ範囲ニ於テ自由ニ之ヲ増減スルモ更ニ支障ナキヲ以テ強テ定員ヲ設クルノ必要ナシ」（1899年4月28日付稟請書⁷⁾）と認められ、1899年5月改正以後、留学生人員数は文部省予算の範囲内での裁量にまかされることになった。

また、【3】留学生の身分と対象拡大については、③1898年6月の改正で留学生となった者は所属学校教官定員の外に置くこと、⑤1901年3月の改正で文部省特別派遣「特派」が可能となった。改正の背景には、留学生の留学期間中に他の者で補欠する際に定員の問題で任用できずに支障が出ていること⁸⁾、海外での各種事項調査や学会への出席など、文部省直轄学校教官以外の者にも海外派遣を要する必要がある、当該学校教官の定員内に身分を置かざるを得ない不便な状況にあることなど⁹⁾、現行規程による弊害があったためである。

1-2. 札幌農学校における「文部省外国留学生」派遣人員数と派遣背景

札幌農学校では、1895年度から1906年度までに計13名が「文部省外国留学生」として文部大臣の認可を受け、海外へ派遣された（表3）。なお、「札幌農学校」枠での留学生派遣が見られない年度は、日清戦争直後の1896年度と日露戦争時期の1904年度の2回である。

文部省直轄学校となった札幌農学校では、①専門課程を2学科（農学科・工学科）から1学科（農学科→本科）に1896年改編し、②付設課程として「農芸伝習科」（1896年9月設置、1899年4月「農芸科」に改称）、「土木工学科」（1897年5月設置）、「予修科」（1898年5月設置）、「森林科」（1899年9月設置、1905年4月「林学科」に改称）、「水産学科」（1907年4月設置）を備え、帝国大学昇格前までに学科課程を1本科・5付設課程に拡充した。1907年9月東北帝国大学農科大学に昇格後、①本科は4学科（農学科・農芸化学

科・林学科・畜産学科) に分化し、②付設課程は5課程(農学実科、土木工学科、大学予科、林学科、水産学科)を維持した。

1895年度から1906年度に派遣された文部省外国留学生13名は、①札幌農学校本科の教授候補者である助教授6名(橋本左五郎、大島金太郎、松村松年、高岡熊雄、時任一彦、星野勇三)、②札幌農学校付設課程(新設の土木工学科)の教授候補者1名(川江秀雄)、③東北帝国大学農科大学の付設課程(新設の水産学科)の教授候補者3名(鈴木寧、野澤俊次郎、藤田経信)、④東北帝国大学農科大学の講座担任候補者である教授2名(新島善直、吉井豊造)、⑤盛岡高等農林学校の教授候補者1名(伊藤清蔵)である。

表3 札幌農学校所属者・関係者の文部省外国留学生数(1895年度～1906年度)

年度	派遣総数	「札幌農学校」枠の派遣者数(内数)	研究学科	留学生名(身分)
1895	11	1	牧畜及畜産製造学	橋本左五郎(助教授)
1896	19	—	—	—
1897	26	1	土木工学	川江秀雄(工学科1895年卒業)
1898	14	1	農芸化学	大島金太郎(助教授)
1899	55	1	農学(主トシテ害虫駆除法、益虫保護法、養蜂論)	松村松年(助教授)
1900	40	1	農業経済及農政	高岡熊雄(助教授)
1901	41	1	農芸物理学	時任一彦(助教授)
1902	46	1	農学	伊藤清蔵(助教授)
1903	35	1	園芸学	星野勇三(助教授)
1904	12	—	—	—
1905	17	1	造林学及保護学	新島善直(教授)
1906	43	4	農産製造、水産製造、水産漁撈、水産養殖	吉井豊造(教授)、鈴木寧(助教授)、野澤俊次郎(教授)、藤田経信(教授)

注) 文部省専門学務局『文部省外国留学生表』より作成し、前掲「退職者履歴資料」・「名誉教授履歴書綴」より補った。所属者・関係者が見当たらない年度には—を記した。なお、年度は発令年度。

札幌農学校の専門課程である本科の教官に焦点をあてると、1895年度～1903年度に文部省外国留学生となった助教授6名(橋本左五郎、大島金太郎、松村松年、高岡熊雄、時任一彦、星野勇三)は、文部省外国留学生の発令を受けた年次には、最高齢の時任一彦は30歳、最年少の大島金太郎・松村松年は27歳であり¹⁰⁾、札幌農学校本科の実科演習を将来主宰すると見込まれた20歳代後半～30歳代前半の若手研究者であった(表4)。

表4 札幌農学校実科演習の専門分野・主宰教官一覧（1896年～1907年）

実科演習名	専門分野	主宰教官→後任教官
農業経済学	農業経済学	佐藤昌介教授
	農政学・殖民学	新渡戸稲造教授→高岡熊雄助教授（1897年～）
植物病理学	植物学・植物病理学	宮部金吾教授
農芸化学	農芸化学	吉井豊造教授→大島金太郎助教授
農学甲科	農学（普通作物論）	南鷹次郎教授
	育種学	南鷹次郎教授→明峰正夫助教授
	農学（特用作物論）	南鷹次郎教授→東海林力蔵助教授
	農芸物理学	南鷹次郎教授→時任一彦助教授
	園芸学	南鷹次郎教授→星野勇三助教授
	養蚕学	須田金之助教授
農学乙科	畜産学	南鷹次郎教授→橋本左五郎教授（1900年～）
農用動物学	昆虫学	松村松年助教授
	動物学	原十太教授→八田三郎講師（1904年～）

注)「付表一 札幌農学校の教官（一八八三～一九〇七）」・「付表二 札幌農学校の雇員・嘱託講師（一八八七～一九〇七）」（『北大百年史』通説、1982年、156-164頁）より作成。なお、実線下線の人物は札幌農学校の時期に、破線下線の人物は東北帝国大学農科大学の時期に文部省外国留学生となった者を示す。

札幌農学校は1896年9月校則改正により「実科規程」を定め、専門課程の本科では、3年級～4年級の学生は、①農業経済学、②植物病理学、③農芸化学、④農学甲科、⑤農学乙科、⑥農用動物学の6つの実科から1つを専攻し、演習方式の専門研究を行なうとした。本科の実科演習を主宰した5教授の内、佐藤昌介、新渡戸稲造、宮部金吾の3教授は外国留学を既にしており、南鷹次郎教授（札幌農学校第2期生・1881年卒業）は米国出張（シカゴ世界博覧会審査官嘱託、1893年6月～12月）¹¹⁾の海外経験を有していた。海外経験の機会がこれまで得られなかった吉井豊造教授（駒場農学校1885年卒業）が45歳にして1906年度の文部省外国留学生に発令されたことにより¹²⁾、本科の実科演習主宰の5教授が全員、海外経験を有することとなった。

1-3. 東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学における「文部省外国留学生」派遣人員数と派遣背景（1907年4月～1920年9月）

1907～1917年度にかけて「文部省外国留学生」として派遣された東北帝国大学農科大学所属教官は、東北帝国大学農科大学卒で16名、文部省特別派遣「特派」卒で2名、合計18名である（表5）。上記の期間、東北帝国大学農科大学の教授会では「文部省外国留学生」を議題にあげてはならず¹³⁾、文部省外国留学生の候補者決定は、札幌農学校長から農科大学長となった佐藤昌介に一任されていたと思われる。留学生候補者の内定を得るための文部省との折衝も、佐藤昌介（農科大学長）が直接行っていた¹⁴⁾。東北帝国大学理科大学が1911年1月仙台に開設された後は、農科大学の留学生候補者（留学先、研究学科、期間、

留学国等)は、①東北帝国大学総長宛てに佐藤昌介(農科大学長)から「海外留学生派遣之義上申」を提出し、②総長から文部省専門学務局長宛に上申するという手続きに変わった¹⁵⁾。

表5 東北帝国大学農科大学所属者・関係者の文部省外国留学生数(1907年度～1917年度)

年度	派遣総数	「東北帝大農大」枠、「特派」枠の派遣者数(内数)	研究学科	留学生名(身分)
1907	30	(東北帝大農大枠) 1	農芸化学	鈴木重礼(助教授)
1908	44	(東北帝大農大枠) 1	土木工学	坂岡末太郎(土木工学科教授)
1909	41	(東北帝大農大枠) 4	獣医学及内科学、畜産学、森林利用学、林政学	小倉鉦太郎(助教授)、高松正信(助教授)、宮井健吉・宍戸乙熊(林学科教授)
		特派 1	地理学及海洋学	下斗米秀三(水産学科教授)
1911	47	(東北帝大農大枠) 2	応用菌学、水産植物学及浮遊生物学	半澤洵(助教授)、遠藤吉三郎(水産学科教授)
1912	45	(東北帝大農大枠) 2	動物学、農学	八田三郎(教授)、東海林力蔵(助教授)
1914	34	(東北帝大農大枠) 2	岩石学、農芸化学	大井上義近(大学予科教授兼農大助教授)、三宅康次(助教授)
1915	25	(東北帝大農大枠) 1	経済学・財政学	森本厚吉(助教授)
1917	45	特派 1	植物学	郡場寛(教授)
		(東北帝大農大枠) 3	漁撈、家畜衛生学、畜産学及皮革製造学	村山佐太郎(水産学科助教授)、葛西勝彌(助教授)、里正義(助教授)
		(九州帝国大学枠) 1	眼科学	越智貞見(九州帝大助教授)

注) 典拠は表3に同じ。帝国大学は「帝大」に、農科大学は「農大」に略した。

東北帝国大学農科大学は、1918年4月北海道帝国大学の設置を受けて北海道帝国大学農科大学となった。1919年4月には北海道帝国大学に農学部(農科大学を改称)、医学部が設置された。1918年度以降は北海道帝国大学の時期であるが、「文部省外国留学生規程」が廃止になる1920年9月までに文部省外国留学生を発令された者について、北海道帝国大学所属者及び関係者の派遣状況を確認すると表6のとおりである。1918年4月から1920年9月までに、①農科大学・農学部所属者5名(田所哲太郎、坂村徹、中島九郎、明峰正夫、逸見文雄)、②新設の医学部の教授候補者8名、③附属水産専門部の教授候補者1名(西村眞琴)が、文部省外国留学生の発令を受けた。

1917・1918年度に例年よりも多く農学部所属者が派遣された背景には、1923年11月新設の京都帝国大学理学部(植物学第一講座担任)へ転出する郡場寛教授(植物学第二講座担任)と、その後任者である坂村徹(大学院学生)が「特派」枠で文部省外国留学生になったためと、畜産学系講座の新設の影響がみられる¹⁶⁾。

表6 北海道帝国大学所属者・関係者の文部省外国留学生数（1918年4月～1920年9月）

年度	派遣総数	北海道帝大の所属者・関係者の派遣者数（内数）	研究学科	留学生名（身分）
1918	60	（東北帝大卒）1	法医学	山上熊郎（東北帝大医科大学助教授）
		（北海道帝大卒）1	生物化学	田所哲太郎（助教授）
		特派 4	植物生理学、生理学、生化学、解剖学	坂村徹（大学院特選給費学生）、宮崎彪之助〔東京帝大助手〕、太黒薫〔東京帝大副手〕、山崎春雄〔熊本医学専門学校教授〕
1919	99	（北海道帝大卒）6	農業経済学、育種学、薬物学、細菌学、耳鼻咽喉科学、病理学	中島九郎（助教授）、明峰正夫（助教授）、三輪誠（東京帝大助手）、中村豊（東京帝大助教授）、香宗我部寿〔区立札幌病院医長〕、今裕〔東京慈恵会医院医学専門学校教授〕
1920	105	（北海道帝大卒）2	水産植物学・浮遊生物学、農産製造学	西村真琴〔奉天南満医学堂教授〕、逸見文雄（助教授）

注）典拠・注記は表5に同じ。なお、文部省直轄学校教官以外の身分は〔 〕に表記した。1919・1920年度の派遣者総数は、辻直人『近代日本海外留学の目的変容』（東信堂、2010年、35頁）に依った。

一方、文部省は1918年、東京帝国大学教授6名と区立札幌病院医師2名（秦勉造、石原弘）を「北海道帝国大学医学部創立委員」に指名して、医学部の教授予定者を選考させ¹⁷⁾、順次、文部省外国留学生としての派遣を進めた（表7）。当時の日本における医学はドイツ医学に範をとっていたが、1917年度～1919年度の文部省外国留学生の発令には、第一次世界大戦の影響により、留学地にドイツが含まれていない。医学部の授業が開始される1922年4月に間に合うように、基礎医学の主な講座（解剖学、生理学、病理学、法医学、細菌学）の担任教授は、主にアメリカ・スイスを留学国として大半が3ヶ年未満の短期留学を終えて着任した。また、「九州帝国大学」卒で1917年度の文部省外国留学生の発令を受けた越智貞見は、帰国後に1922年6月付で北海道帝国大学医学部の教授に就任した¹⁸⁾。

表7 文部省外国留学生（1917年4月～1920年9月発令）にみる北海道帝国大学医学部教授候補者一覧

氏名	研究学科	留学国	留学年限	留学期間
越智貞見	眼科学	英・仏・瑞西・米	3ヶ年（短縮有り）	1917.11出発～1920.9帰国
山上熊郎	法医学	米・英・瑞西	2ヶ年半	1918.3出国～1920.12帰国
宮崎彪之助	生理学	米・瑞西・英・仏	2ヶ年	1918.11出発～1921.3帰国
太黒薫	医化学	米・瑞西	2ヶ年（延期有り）	1918.12出国～1922.4帰国
山崎春雄	解剖学	米・瑞西・仏・英	2ヶ年	1919.1出国～1921.6帰国
三輪誠	薬物学	米・瑞西・英・仏・伊・独	2ヶ年（延期有り）	1920.9出国～1922.5帰国
中村豊	細菌学	米・瑞西・仏・英	2ヶ年（延期有り）	1920.2発令～1922.6帰国
香宗我部寿	耳鼻咽喉科学	米・英・独	1ヶ年8ヶ月	1919.11出発～1922.4帰国
今裕	病理学	米・英・独	1ヶ年	1920.8発令～1921.12帰国

典拠）典拠・注記は表6に同じ。

2. 札幌農学校本科の実科演習・付設課程の系譜毎にみる文部省外国留学生の特徴

札幌農学校の本科の6つの実科演習（農学甲科、農学乙科、農芸化学、農業経済学、農用動物学、植物病理学）は、東北帝国大学農科大学の新設講座の基盤となり、主宰する教官の専門研究分野が引き継がれた。そこで、本章では、①札幌農学校の本科の6つの実科演習を主宰した各教室（農学教室、畜産学教室、農芸化学教室、農業経済学教室、動物学教室・昆虫学教室・植物学教室）と、②東北帝国大学農科大学の本科課程に新設された林学科を主宰した林学教室、③付設課程の土木工学科・水産学科の系譜に焦点をあてて、各系譜における留学生派遣の特徴と留学生活の一端を紹介する。なお、札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学農科大学（農学部に1919年改称）の所属者・関係者における文部省外国留学生の名簿は、《巻末一覧》として示すこととする。

2-1. 農学教室における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

農学教室では、1903年度から1919年度にかけて、4名（時任一彦、星野勇三、東海林力蔵、明峰正夫）が文部省外国留学生の発令をうけた。南鷹次郎教授に師事した上記4名は、南教授の広範な「農学」から分化した農芸物理学（時任）、園芸学（星野）、育種学（明峰）、特用作物学（東海林）を担当・専門とした。4名は、東北帝国大学農科大学の農学系の講座（農芸物理学講座、園芸学講座、農学第三講座、農学第四講座）の担任候補者として、順次、海外派遣されたことがうかがえる（表8）。

表8 農学教室の担当講座一覧（1907年～1918年）

東北帝国大学農学科第一部の系譜		
【札幌】①本科（農学甲科）→【東北帝大農大】②農学科→農学科第一部（1916）		
【主宰】【農学】南鷹次郎→明峰正夫、東海林力蔵、時任一彦、星野勇三 【養蚕学】須田金之助		
講座名（設置年）	研究分野	担任教官【留学経験】
農学第一講座（1907）	普通作物学	南鷹次郎【米国出張1893,1909】
農学第三講座（1915）	育種学	明峰正夫【文留1919】
農学第四講座（1917）	特用作物学	東海林力蔵【文留1912】
農芸物理学講座（1907）	気象学・農業機械学・土地改良学	時任一彦【文留1901】
園芸学講座（1907）	園芸学・果樹園芸学・蔬菜園芸学	星野勇三【文留1903】
動物学、昆虫学、養蚕学第三講座（1907）	養蚕学・栽桑学	須田金之助【印・清国調査1908】

注）『札幌農学校一覧』、『東北帝国大学農科大学一覧』より作成し、前掲「退職者履歴資料」・「公文類聚」により補った。表中、札幌農学校は「札幌」、東北帝国大学農科大学は「東北帝大農大」に、「文部省外国留学生」は「文留」に略した。「文留」には発令年度を追記した。なお、「養蚕学」は、札幌農学校では本科（農学甲科）の系譜に置かれている。

1903年～1907年に米・仏・英・独国に留学した星野勇三は、コロンビア大学、コーネル大学、ミズーリ植物園、ベルサイユの園芸学校、王立キューガーデンで園芸学研究にあた

り、各地の植物園を見学した。ミズーリ植物園では、同窓の芳賀鉄五郎（札幌農学校第20期生）が、星野と同じく園芸学研究のため、農商務省海外実習生として派遣されていた¹⁹⁾。1913年～1915年に米・英・独に留学した東海林力蔵は、「特用作物」が研究対象であることから、ベルリンからの帰路にインドへ立ち寄り、熱帯地方の特用作物（サトウキビなど）を見学するため、留学期間の2ヶ月延期を佐藤昌介農科大学長に申し出て、文部省に延期を出願する許可を受けている²⁰⁾。

2-2. 畜産学教室における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

札幌農学校において文部省外国留学生の第一号は、橋本左五郎助教授（札幌農学校第8期生）である。畜産学教室では、1895年度から1917年度にかけて、6名が文部省外国留学生の発令をうけた。橋本の留学後は、東北帝国大学農科大学の畜産学講座（二講座）と獣医学講座（二講座）の担任候補者として、①畜産学・畜産製造学系と②獣医学系の2系統から交互に留学生が派遣された。①畜産学・畜産製造学系からは橋本の門下生である高松正信（札幌農学校第24期生）と里正義（農科大学1909年卒業）の農学士2名が、②獣医学系からは東京帝国大学農科大学出身の獣医学士2名（小倉鉦太郎、葛西勝彌）が文部省外国留学生となり、帰国後には講座を主宰した（表9）。

表9 畜産学教室の担当講座一覧（1907年～1921年）

東北帝国大学農科大学畜産学科の系譜			
【札幌】①本科（農学乙科）→【東北帝大農大】②畜産学科→③畜産学科第一部・畜産学科第二部（1916）			
【主宰】【牧畜・畜産学】南鷹次郎→【畜産学・畜産製造学】橋本左五郎			
学科名	講座名（設置年）	研究分野	担任教官【留学経験】
畜産学科第一部	畜産学第一講座（1907）	畜産製造学・畜産学（牛学）	橋本左五郎【文留1895】
	畜産学第二講座（1910）	畜産学（馬学）	高松正信【文留1909】
	皮革製造学講座（1920）	皮革製造学	里正義【文留1917】
畜産学科第二部	獣医学第一講座（1910）	獣医学外科学	加藤泰治【McGill Univ.】
	獣医学第二講座（1911）	獣医学内科学・病理学	小倉鉦太郎【文留1909】
	家畜衛生学講座（1920）	家畜衛生学・細菌学・免疫学	葛西勝彌【文留1917】

注）典拠・注記は表8に同じ。

農学及び畜産学の全般を担っていた南鷹次郎教授（札幌農学校第2期生）の後継者のひとりとして、1895年当時28歳の橋本左五郎は「畜産製造学をやって来い」と期待されて留学となったという。留学生活の一端について、橋本は次のとおり語っている²¹⁾。

南鷹次郎先生の薫陶を受け、大学に残って先生の御指導に与り三十三年にドイツ留学させられ、始めホーヘンハイムの大学に一年居り、後の農務局長酒匂常明氏と一緒にいた。それからライプツヒの大学で駒場に来たケルネル先生を訪いしばらくいたが、一番長くいたのはハレーの大学、その間オーストリア、ハンガリー、デンマーク

等を廻り、帰りに英国、米国を経て帰国したが、ハレーではキューンという老先生からバター、チーズ、マーガリンチーズ等を学び肉製品のハム、ソーセージ等も習った。

元来が畜産製造学をやって来いといわれたが、その外に牛や草の事など畜産一般の事も広くあさったものだった。

ドイツでの橋本左五郎は、ホーエンハイム大学で1年修学し、ライプティヒ大学で駒場農学校元教師のオスカル・ケルネル (Oskar Kellner, 1851-1911) に師事、ハレ大学に転学してユリウス・キューン教授 (Julius Gotthelf Kühn, 1825-1910) に師事、乳製品 (バター、チーズ、マーガリン等) と肉製品 (ハム、ソーセージ等) の畜産製造学を研究したほか、牛学や飼料の牧草についても研究し、畜産全般の研究に意欲的に従事した。

しかし、練乳については、工場は「緊要の点に至て、之が一見を拒絶する」という有様で、練乳製法は機密であり見学を拒絶され、「独り練乳の方法に至ては之を見せざりき、又学者に就て之を質問したるも、要領を得ずして、唯単に書籍に示す如しとの答を得るに過ぎざりき、然れ共書籍の教ゆる所に従て製造を試むるも一も^マ成效することなく、久しく疑問を解きえざりし」と大学でも要領を得ず、留学中に十分に修得できなかったという²²⁾。

1910年～1913年に留学した高松正信は、ドイツでの修学生活について、帰国直後に、次のように語っている²³⁾。

明治四十三年三月、私は始めて独逸国ドレスデンに赴き、其処の有名なる高等獣医学校に入学し、此学校に居ること約一ヶ年半、当時教授として有名なりし人は彼のブツシュ博士にして、私は此博士から畜産学の講義を聴きました。畜産学の教授方法は矢張日本と同じく、一般総論各論と云ふ具合に、而して此学校では主に牛の事を教へます。

教授用の牛は私の居る時二十頭位あつて、牛舎も無論模範的に而して夫が、殊に面白いと思つたのが教室の下方はスグ牛舎ですから、何時でも行つて見られ、即ちかうして理想よりは寧ろ実地と云ふ風に教ゆる方針を取つて、始終其牛を曳き出しては説明を与へられましたので、理解が早いやうに思ひました。

ドレスデンを去つてからハーレーの農科大学に入りました。此所でも矢張畜産学の研究です。教授には独逸唯一の否な世界屈指のシモン、フォン、ナトジウス Simon von Nathusius 博士 (此時年齢四十九歳位) が居られました、此博士はヘルマンナスージュス、セツテガストなどの諸博士と比肩する世界の馬学者であつて此学校では私は重に馬の研究をしたのであります。

高松は、ドレスデンの高等獣医学校で Busch 博士に師事して畜産学講義を聴講して、ハレ大学農科大学ではナトジウス博士 (Simon von Nathusius, 1865-1913) に師事した。前者では牛学、後者では馬学を修めており、橋本と同様にドイツの大学を主軸とした修学であった。ドイツの大学は「入学をするにも至つて簡単」であり、「自分が希望の講座を紙に書いて会計課に差出しますと、会計課では夫を受附記入をして成規の手続きを踏んだ上

に、担任教授の方へ廻します。左様すると教授は之を認める、之れ丈けの手続きで入学が出来るのであります」と、ドイツにおける大学の講義聴講の寛容さに感嘆している²⁴⁾。ドイツ大学での修学後、高松はドイツ国内の家畜飼養現況を視察し、渡英後には現地の馬を観察・見学した。帰路は喜望峰経由の海路で、「寄港地へは大抵上陸をして私は重に附近の農業及畜産の観察をしました」と、南アフリカのケープタウンなど、寄港地に所在する農業学校や農業・畜産現況を視察したという²⁵⁾。

橋本・小倉・高松はドイツを主たる留学国として滞在したが、第一次世界大戦の影響を受ける1914年以降は、留学先はアメリカとイギリスに変わった。葛西勝彌・里正義の修学先はアメリカの大学であった。葛西の知友である高野六郎は「第一次世界戦争がなかなか終わらないので、留学生候補者は何れもシビレをきらし、せめてアメリカへでも行つてみようといひ出した時世であった²⁶⁾」と、当時の若手研究者の心境を伝えている。葛西は、1914年から夏期休暇を利用して北里研究所で細菌学の研鑽をつみ、スピロヘータの研究に従事していた。1917年渡米した葛西は、ミシガン大学医学部の細菌学教室でノーヴィ教授のもとでもスピロヘータの研究を継続した。帰国の際にはトリパノソーマや鼠肉腫など、日本では入手困難な数々の研究材料を収集し、札幌の大学で門下生たちと血液学的変化の研究・実験に専念したという²⁷⁾。

2-3. 農芸化学教室における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

農芸化学教室からの文部省外国留学生は、1898年アメリカに派遣された大島金太郎助教授（札幌農学校第11期生）が嚆矢である。大島は吉井豊造教授の門下生であり、「農芸化学」系譜の後継者の筆頭であった。大島金太郎が留学先で師事した研究者には、Wilbur Olin Atwater（1844-1907）、Ernest Leopold Salkowski（1844-1923）、Bernhard Tollens（1841-1918）等があり、アメリカ・ドイツの著名な生化学者・農芸化学者に多く師事していることがうかがえる。大島がゲッティンゲン農事試験場、ベルリン大学の病理学研究所、アメリカ農商務省の試験場で行った実験の成果は、現地で論文発表された²⁸⁾。

農芸化学教室では合計7名（大島金太郎、吉井豊造、半澤洵、鈴木重礼、三宅康次、田所哲太郎、逸見文雄）が文部省外国留学生となった。講座担任の教授及び講座担任候補の助教授は、全員、文部省外国留学生として海外に派遣されたことになる（表10）²⁹⁾。一方、新設の水産学科教授候補で海外派遣された鈴木寧（札幌農学校第22期生）は、本科3～4年級に「農芸化学」を専攻した者であった。「農芸化学」は、他の研究分野に比して、文部省外国留学生を多く派遣できた研究分野といえる。留学先の国は、第一次世界大戦前はドイツが主流であったが、1914年以降はアメリカ・イギリスに切り替わった。

1911年にドイツに留学となった半澤洵は、「植物病理学」専攻の札幌農学校第19期生（1901年卒業）で宮部金吾教授の愛弟子であるが、1902年1月「農芸化学科研究生」となり、植物病理学教室から農芸化学教室に移って、細菌学・応用菌学の研究に従事していた³⁰⁾。留学先のハノーファー工科大学では、醗酵菌類研究の第一人者ウェーマー教授（C.

Wehmer,1858-1935) に師事し、“クモノスカビ”の新種について純粹培養・各種試験を行い、教授との連名で「リゾープス・デレマー菌」(学名: Rhizopus delemar) と命名・発表している³¹⁾。北里柴三郎博士の紹介状をもって訪ねたパスツール研究所では生化学者のベルトラン博士 (Gabriel Emile Bertrand,1867-1962) の下で還元糖の定量分析を、ライプティヒ大学農科大学では農芸化学者のレーニス博士 (Felix Löhnis,1874-1930) の下で農業微生物学を研究した³²⁾。半澤も大島と同様に、各学界で世界的に権威・研究功績のある学者に師事し得たといえる。

さらに、半澤は巡歴研究として1913年 8月～9月にフランス・ドイツ・イタリア・スイス・ルクセンブルク・オーストリア、10月にロシア・フィンランド・デンマーク内の大学・研究所を巡り、植物病理学・細菌学等の実験室・教室を視察した。翌年には、視察を踏まえて帰国後に主宰する「応用菌学講座」(1915年新設)の教室建物について自ら筆をとって設計図を作成、宮部金吾教授に送付して提案した³³⁾。

表10 農芸化学教室の担当講座一覧 (1907年～1918年)

東北帝国大学農科大学農芸化学科の系譜		
【札農】①本科 (農芸化学) → 【東北帝大農大】②農芸化学科 【主宰】〔農芸化学〕吉井豊造→大島金太郎、三宅康次、田所哲太郎、逸見文雄 *〔植物病理学・菌学〕宮部金吾→〔応用菌学〕半澤洵		
講座名 (設置年)	研究分野	担任教官【留学経験】
農芸化学第一講座 (1907)	土壌学・肥料学	鈴木重礼【文留1907】→三宅康次【文留1914】
農芸化学第二講座 (1907)	食品化学・家畜飼養学	大島金太郎【文留1898】
農芸化学第三講座 (1908)	生物化学	大島金太郎分担
農産製造学講座 (1910)	農産製造学	吉井豊造【文留1906】
応用菌学講座 (1915)	応用菌学・農業微生物学	半澤洵【文留1911】

注) 典拠・注記は表8に同じ。なお、不在者代理の際の担任・兼任は略す。

2-4. 農業経済教室における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

農業経済教室では、4名 (高岡熊雄、伊藤清蔵、森本厚吉、中島九郎) が文部省外国留学生の発令をうけた。この4名が留学生候補者として推薦された背景はすべて異なる。

高岡熊雄の留学は、新渡戸稲造教授の病氣退官による教官欠員で授業に支障がでていることから、新渡戸稲造教授の補欠とする教官の海外派遣が目的であった³⁴⁾。

伊藤清蔵の留学は、1902年新設の盛岡高等農林学校の教授候補者として、海外派遣が目的であった。渡独する高岡熊雄助教授の補欠として1900年7月助教授となった伊藤は、佐藤昌介校長から、「伊藤君、文部省が新しい試みとして、盛岡に高等農林学校を設立することは君も聞いて居るぢアらう。その経済科の教授たらしめんがために、今回、君を三年間独逸に留学せしめんとするのであるが、どうぢア」³⁵⁾と、勧められたという。

一方、森本厚吉の留学は、1914年欧州の戦乱の状況から、「目下ノ状況ニ於テハ欧州大

陸ハ勿論英国ニ於ケル修学モ或ハ不可能ト可相成哉」との1914年10月30日付文部省専門学務局長通牒を受け、東北帝国大学事務官から「特ニ米国ノミニ於テ修学セシメ得ヘキ者ノ御選定ノ上改メテ御上申相成度」と、米国のみで留学が完結するものを選考して改めて上申するように農科大学に通知があったためである。農科大学では、既の上申していた留学候補者2名〔大井上義近（岩石学研究、独・米・英国）、吉田新七郎（家畜生理学研究、独国）〕以外の者として、ジョンズ・ホプキンス大学大学院で博士論文を完成させたいと希望する森本厚吉を、「経済学財政学研究ノ為満二ヶ年間米国へ留学」として11月19日付で上申した³⁶⁾。森本には翌1915年9月に外国留学生を命じる発令があった。

中島九郎の留学は、佐藤昌介教授1918年4月が北海道帝国大学総長に就任したため、農学第二講座担任であった佐藤教授の補欠とする教官の海外派遣が目的であったと考えられる（表11）。1919年4月、中島は農学第二講座担任に任命された³⁷⁾。

表11 農業経済学教室の担当講座一覧（1907年～1919年）

東北帝国大学農科大学農学科第二部の系譜		
【札幌農学校】①本科（農業経済学）→【東北帝大農大】②農学科→③農学科第二部（1916） 【主宰】〔農業経済学・農史〕佐藤昌介→中島九郎 〔農政学・殖民学・経済学〕新渡戸稲造→高岡熊雄、森本厚吉		
講座名（設置年）	研究分野	担任教官【留学経験】
農学第二講座（1907）	農業経済学・農史	佐藤昌介【Johns Hopkins Univ.】 →中島九郎【文留1919】
農政学、殖民学講座（1907）	農政学・殖民学	高岡熊雄【文留1900】
経済学、財政学講座（1915）	経済学・財政学	森本厚吉【文留1915】

注）典拠・注記は表8に同じ。

上記4名（高岡熊雄、伊藤清蔵、森本厚吉、中島九郎）の主たる留学国は、第一次世界大戦前の高岡・伊藤はドイツで、大戦中の森本・大戦後の中島はアメリカとなった。高岡は、恩師の新渡戸稲造に勧められ、新渡戸の紹介状を携えて、ボン大学に1901年4月入学した。ボン大学でフォン・デア・ゴルトツ教授（Theodor von der Goltz, 1836-1905）の農業政策・ドイツ農業史、デーツェル教授（Heinrich Dietzel, 1857-1935）の理論経済学・経済政策・財政学などを聴講した高岡は、1902年秋にベルリン大学へ転学、ワグナー教授（Adolf Heinrich Gotthilf Wagner, 1835-1917）の理論経済学・経済政策・財政学等、シュモラー教授（Gustav von Schmoller, 1838-1917）の理論経済学・ドイツ経済史等を聴講し、農政学者のゼーリング教授（Max Sering, 1857-1939）に師事した³⁸⁾。1903年ドイツに留学した伊藤清蔵も、高岡と同様に、まずはボン大学に入学してゴルトツ教授の農業史・農政学・農業経営学を聴講した。その後は、ハレ大学に転学して経済学の研究に専念している³⁹⁾。森本厚吉は、予定通り、ジョンズ・ホプキンス大学大学院に1915年11月入学して博士論文の執筆にあたり、“The Standard of Living in Japan.”を完成させて1916年6月 Ph.D. を取得

した⁴⁰⁾。中島九郎は、恩師佐藤昌介教授の紹介状を携えて、ウイスコンシン大学のイリー教授 (Richard T. Ely, 1854-1943) を訪ね、イリー教授のもとで農業経済学の研究に従事した⁴¹⁾。

2-5. 動物学・昆虫学・植物学教室における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

動物学教室では1名 (八田三郎)、昆虫学教室では1名 (松村松年)、植物学教室では2名 (郡場寛、坂村徹) が文部省外国留学生の発令をうけた。

1912年～1915年に留学した八田三郎は、ベルリン大学で動物発生学研究に従事し、ヤツメの血管発生に関する論文の執筆に専念していたが、戦禍に巻き込まれて、印刷準備途中でドイツを離れるほかなく、冬のフィンランドから馬橇でモスクワへ、シベリアでインフルエンザに罹患して野戦病院に収容された後、帰国した。論文は帰国後に *Zoologische Jahrbücher*. に掲載となった。「応用科学の学部に於て基礎学科である動物生理学と動物発生学とを担当され、八田先生の北大に於ける存在は一つの異彩であつた」と門下生の犬飼哲夫は評している⁴²⁾。

表12 動物学教室・昆虫学教室・植物学教室の担当講座一覧 (1907年～1921年)

東北帝国大学農科大学農学科第三部の系譜		
【札農】①本科 (植物病理学)、(農用動物学) → 【東北帝大農大】②農学科→③農学科第三部 (1916)		
【札農】〔植物学・植物病理学・菌学〕宮部金吾 〔植物生理学〕宮部金吾→柴田桂太→大野直枝→郡場寛→坂村徹 〔動物学〕原十太→八田三郎 〔昆虫学〕松村松年		
講座名 (設置年)	研究分野	担任教官【留学経験】
植物学第一講座 (1907)	植物学・植物病理学	宮部金吾【Harvard Univ.】
植物学第二講座 (1908)	植物生理学	柴田桂太【Universität Leipzig等】→大野直枝【Universität Leipzig】→郡場寛【文留1917】→坂村徹【文留1918】
植物学第三講座 (1920)	菌学	宮部金吾分担
動物学、昆虫学、養蚕学第一講座 (1907)	動物学・動物発生学・動物生理学	八田三郎【文留1912】
動物学、昆虫学、養蚕学第二講座 (1907)	昆虫学・応用昆虫学・昆虫分類学	松村松年【文留1899】

注) 典拠・注記は表8に同じ。板倉聖宣監修『事典日本の科学者』(日外アソシエーツ, 2014年)により補った。

1899年～1901年にドイツへ留学した松村松年は、ドイツに2年、ハンガリーに1年滞在した。ドイツではベルリン大学の昆虫学者 (鱗翅学者カルシュ、甲虫学者コルベ、半翅類学者クルカツ、昆虫学会会長クラーツ、その高弟ホーンやハイモンスなど) と過ごした。ハンガリーではブダペストにある国立博物館で館長ホルバート博士の懇請を受け、ウンカを中心に昆虫標本の整理・同定に従事した⁴³⁾。1902年夏、松村はアフリカでの昆虫採集旅行を決行する。「海岸の砂をちょっと掘って見て驚いた。その中には、長脚の翅のな

いウンカや、甲虫が無数に潜んでいたのではないか。わたくしは飛びたつ思いで、これ等の昆虫を貪り採った。そしてたちまち多数の新種を手にいれたのであった」⁴⁴⁾（チュニスの海岸にて）と、松村にとっては未知の昆虫の捕獲に興奮した。

一方、植物学教室では、植物第一講座担任の宮部金吾教授は北海道庁官費で、植物第二講座担任の柴田桂太教授、その後任の大野直枝教授は私費で既に留学経験を有していた（表12）。1917年度の文部省外国留学生になった郡場寛は、柴田・大野と同様にライプティヒ大学の植物生理学者ペファー博士（Wilhelm Pfeffer, 1845-1920）に師事する予定であったが、第一世界大戦の影響で欧州よりアメリカへ先に渡航したため、ライプティヒに到着したのはペファー博士の逝去後であった⁴⁵⁾。一方、坂村徹は、ハーバード大学でオスターハウト教授に、ベルン大学でアッシャー教授に師事した⁴⁶⁾。

2-6. 林学教室における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

東北帝国大学農科大学に、大学本科として林学科が1907年設置され、1910年から授業が開始された。林学科を担当する講座は表13のとおり、1918年までに5講座が設置された。

表13 林学教室の担当講座一覧（1909年～1918年）

東北帝国大学農科大学林学科及び林学分野の付設課程の系譜		
《付設課程》【札農】①森林科（1899）→②林学科（1905） →【東北帝大農大】③林学科（1907）→④林学実科（1910）		
《大学本科》【東北帝大農大】林学科（1907新設、1910授業開始）		
講座名（設置年）	研究分野	担任教官【留学経験】
林学第一講座（1909）	森林経理学及数学、林業経済学	小出房吉【文留1900】
林学第二講座（1910）	造林学、森林保護学	新島善直【文留1905】
林学第三講座（1911）	林学施業学、森林利用学	宮井健吉【文留1909】
林学第四講座（1911）	森林理水及砂防工学、森林測量学	影山純介・吉川元民分担
林政学及森林管理学講座（1912）	林政学、森林管理学	宍戸乙熊【文留1909】

注）典拠・注記は表8に同じ。なお、影山・吉川は後に文部省在外研究員となる。

林学第一講座の担任教授である小出房吉は、1900年度の文部省外国留学生に盛岡高等農林学校の教授候補としてなっており、ミュンヘン大学、ウィーン高等農林学校で林学を研究し、スイス・ロシア・オランダ等を巡歴している⁴⁷⁾。一方、小出以外の講座担任予定者には留学歴がないため、1905年度から講座担任予定者である新島善直、宍戸乙熊、宮井健吉が、順次、文部省外国留学生として海外へ派遣された。札幌農学校本科・森林科の授業を担当していた新島善直は、1905年ドイツに留学し、ギーセン大学においてヘッス教授に師事、造林学・森林保護学を研究した⁴⁸⁾。

2-7. 土木工学科・水産学科における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

(1) 土木工学科における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

札幌農学校工学科を1895年卒業した川江秀雄が1897年に、工学科を1894年卒業した坂岡末太郎が1908年に、文部省外国留学生の発令を受けた。川江は1897年5月新設の土木工学科の教授候補者として、坂岡は東北帝国大学農科大学の土木工学科主任として、土木工学研究のために留学が認可された。

川江は、1895年に私費でスツットガルト工科大学に入学しており、文部省外国留学生になった後も、スツットガルト市に残って水利工学の实地研究を行い、1898年8月から1899年6月にかけて欧州各国（独・墺・白耳義・伊・瑞西・仏・匈牙利・和蘭等）を巡歴した。1899年8月には恩師の廣井勇も勤めた米国のエッジモア橋梁会社（Edge Moor Bridge Co.）の技師となり、1900年3月まで橋梁設計・建築の实地研究に従事した後、米国内を巡歴して、同年9月に帰国した。川江は北海道庁鉄道技師を兼務しながら土木工学科教授を勤めていたが、1902年通信省に転出した⁴⁹⁾。川江の後任者として、1902年10月、北海道庁鉄道技師の坂岡末太郎が土木工学科教授に任命され⁵⁰⁾、1908年～1910年に米・独・仏国に留学した。両者ともに鉄道技術者であった。

(2) 水産学科における文部省外国留学生の派遣状況とその特徴

1907年4月新設の水産学科では文部省外国留学生として発令を受けたのは5名、鈴木寧（前北海道庁水産学校教諭）、野澤俊次郎（兼北海道庁技師）、藤田経信（前農商務省水産講習所技師）、遠藤吉三郎、村山佐太郎である。鈴木（1906年発令）は水産製造、野澤（1906年発令）は水産漁撈、藤田（1907年発令）は水産養殖、遠藤（1911年発令）は水産植物学及浮遊生物学、村山（1917年発令）は水産漁撈の研究を命じられた。1906年～1907年に発令をうけた野澤と藤田は、開学準備の業務に留学前から追われていた。水産学科の設備・機械・図書などの購入品について東京で打ち合わせ、留学後のフランスやロンドンでも打ち合わせや漁撈器具類の調達に奔走した⁵¹⁾。

一方、1906年4月にイタリアのヴェスヴィオ火山が噴火し、水産学科教授で火山学者の下斗米秀三が地理学及び海洋学研究のために、文部省特別派遣「特派」枠で1910年イタリアに留学を命じられた。下斗米は1913年ナポリ大学の講師となり、1915年12月まで帰国せず、ヴェスヴィオ火山の研究に専念した⁵²⁾。

むすび

札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学は、「文部省外国留学生」制度を、1895年度から1920年度にかけて、①本科の教授候補者、②農科大学の講座担任及びその候補者（教授・助教授）、③新設の付設課程（土木工学科、水産学科及び附属水産専門部）の教授候補者・教授に主に運用していた。井口賢三（東北帝国大学農科大学1910年卒業、

後に畜産学第三講座担任教授）が、「昔は教授になる一つの有力な条件として海外留学が挙げられて居つた」⁵³⁾との回想はその運用の実態をよく表している。

札幌農学校本科の6つの実科演習（農学甲科、農学乙科、農芸化学、農業経済学、農用動物学、植物病理学）を主宰した各教室と付設課程（土木工学科・水産学科）に着目して文部省外国留学生を確認すると、留学先の大学、師事する研究者、聴講科目等の類似性が見られたり、研究分野の差異により様々な態様があることがうかがわれる。

園芸学を研究目的とした留学生（星野勇三）は、各地の植物園・庭園の見学を要し、海外の園芸種の品種をノートに記録し、植物園附属の園芸学校や大学で講義をきき、実験・実習に従事した⁵⁴⁾。

特用作物学を研究目的とした留学生（東海林力蔵）は、欧米の植物だけにとどまらず、熱帯地方の特用作物や熱帯植物についても、留学期間を延期してでも見学したいと熱望した。

畜産学を研究目的とした留学生（橋本左五郎、高松正信）は牛学・馬学・畜産学全般の講義をドイツで受けた。畜産製造物の製造方法を探る巡歴調査を行った留学生（橋本左五郎）には、「帰朝して考えた事は肉製品ではハムよりソーセージの将来に注目したし、皮革工業の将来が重要だと思った」⁵⁵⁾と、留学先での見聞から、帰国後の研究の方向性を定めた者もいた。

家畜衛生学を研究目的とした留学生（葛西勝彌）は、アメリカの最新の細菌学研究に身をおき、日本では入手できない研究材料を収集し、帰国後に大学の実験室で活用した。

農芸化学を研究目的とした留学生（大島金太郎）は、農事試験場や大学の研究所で、食糧の栄養化学の研究・分析実験の日々を過ごして、実験成果を論文で発表した。

農業経済学を研究目的とした留学生（高岡熊雄、伊藤清蔵）は、ドイツの大学での経済学・農政学等の講義を聴講する座学が主であったが、内国植民政策の実地調査や植民地の現況調査も行った。

昆虫学を研究目的とした留学生（松村松年）は、博物館や大学の標本をくまなく調査するとともに、留学先の近隣諸国にとどまらず、アフリカ大陸まで未知の昆虫を求めて、採集の旅に出かけた。

土木工学を研究目的とした留学生（川江秀雄）は、恩師の廣井勇と同様に、現地の橋梁会社に技師として勤めて実地研究を基本とし、各地の橋梁の構造・鉄道の敷設視察に欧米を巡った。

一方、新設の付設課程の水産学科の教授候補者たちは、欧州・北欧を中心に海藻標本の腊葉庫調査に従事する者（遠藤吉三郎）もいれば、文部省と札幌農学校との折衝を進めながら、水産学科の備品・設備の調達を兼ねて英国・仏国で過ごした者（藤田経信、野澤俊次郎）もいた。

文部省外国留学生は、自身の専門とする研究分野に合わせて修学場所・見学先・調査先を決めて、研究材料・標本資料の収集、新設学科の備品の選定・調達など、各自の様々な

目的を果たしていたといえよう。一方、文部省外国留学生たちは、台湾総督府や通信省、農商務省など、他の機関から海外派遣された者たちとも手紙（特に絵葉書）で頻繁に近況を伝えて情報を共有し、会合をもっては情報交換をしていた。また、母校にいる教官（宮部金吾教授など）には、留学生たちから最新の現地情報、知友・研究者の動向が手紙によって伝えられ、各種情報が集約された。今後は、海外派遣された留学生のネットワークを明らかにしていくことが必要であり、留学生の日誌（半澤洵、坂村徹）や、海外との往復書簡（八田三郎・東海林力蔵・星野勇三・高岡熊雄・宮部金吾旧蔵書簡）、留学先での写真など、当時の留学生・関係者の資料の解読を進めて、文部省外国留学生制度が札幌農学校から北海道帝国大学の学術系譜にどのような影響を与えたのか、その実態を更に深めて考察することを課題としたい。

[注]

- 1) 北海道大学大学文書館所蔵「宮部金吾旧蔵書簡」には、宮部金吾に宛てられた留学中の渡瀬庄三郎・廣井勇・新渡戸稲造の書簡や、留学中の宮部に札幌から近況を伝える佐藤昌介の書簡が残されている。
- 2) 『大日本帝国文部省年報第二十二年報 明治二十八年』1897年2月、8-9頁。
- 3) 1892年11月22日付『官報』第2822号、234頁。
- 4) 「文部省外国留学生規程中ヲ改正ス」（「公文類聚・第二十編・明治二十九年・第二十二卷・学事・学制（小学校～雑載）、産業・農事～博覧会共進会」、[請求番号] 類00765100、[件名番号]003、国立公文書館所蔵）。
- 5) 「文部省外国留学生規程中ヲ改正ス」（「公文類聚・第二十一編・明治三十年・第二十三卷・軍事・陸軍・海軍、学事・学制（小学校～雑載）」、[請求番号] 類00793100、[件名番号]024、国立公文書館所蔵）。
- 6) 「文部省外国留学生規程中ヲ改正ス」（「公文類聚・第二十三編・明治三十二年・第二十八卷・軍事二・海軍・雑載、学事・学制・図書・雑載」、[請求番号] 類00861100、[件名番号]021、国立公文書館所蔵）。
- 7) 注6に同じ。
- 8) 「文部省外国留学生規程中ヲ改正ス」（「公文類聚・第二十二編・明治三十一年・第二十四卷・軍事二・海軍二、学事・学制～雑載、産業・商事～鉱山」、[請求番号] 類00827100、[件名番号]010、国立公文書館所蔵）。
- 9) 「文部省外国留学生規程中ヲ改正ス」（「公文類聚・第二十五編・明治三十四年・第十六卷・軍事・陸軍・海軍、学事・学制～雑載」、[請求番号] 類00921100、[件名番号]017、国立公文書館所蔵）。
- 10) 「退職者履歴資料」・「名誉教授履歴書綴」（北海道大学大学文書館所蔵）を参照。
- 11) 宮部金吾「故南鷹次郎君小伝」、『札幌同窓会第五十八回報告 昭和十一年十二月』。
- 12) 「退職者履歴資料 四 大正7～8」（北海道大学大学文書館所蔵）内の吉井豊造の項を参照。
- 13) 農科大学教授会議事録（北海道大学大学文書館所蔵）を参照。
- 14) 佐藤昌介農科大学長が、上京に際して、留学生候補者の内定を得るために文部省と折衝してきたとうかがわれる、在札の宮部金吾教授に宛てた書簡（1908年5月21日付、1910年6月25日付）が残っている（北海道大学大学文書館所蔵）。
- 15) 東北大学史料館所蔵の2簿冊（簿冊「外国留学生関係（一）明治四十四年以降 東北帝国大学」、簿冊「外国留学生関係（二）東北帝国大学」）に、1911年度以降の東北帝国大学農科大学からの上申書類や、留学生からの留学期間延期願書や帰学届等の書類が綴られている。
- 16) 郡場寛教授を東北帝国大学所属のまま京都帝国大学教授候補として留学生派遣を上申する関係文書

一式（東北帝国大学総長宛て京都帝国大学総長照会文書、1917年11月26日付など）、坂村徹に関する「海外留学生派遣之儀上申」（1918年1月4日付、東北帝国大学総長宛て東北帝国大学農科大学長上申書）は、前掲簿冊「外国留学生関係（二）東北帝国大学」に綴られている。

- 17) 北大医学部五十年史編纂委員会編『北大医学部五十年史』、北海道大学医学部創立五十周年記念会館建設期成会、1974年、82-83頁。
- 18) 「名誉教授履歴書綴（一）」（北海道大学大学文書館所蔵）内の越智貞見の項を参照。
- 19) 1904年9月7日付宮部金吾宛て芳賀楯五郎書簡（北海道大学大学文書館所蔵）。
- 20) 1915年7月14日付星野勇三宛て東海林力蔵書簡（北海道大学大学文書館所蔵）。
- 21) 小松純之助「越えて来た道（80）橋本左五郎先生を訪ふ」、『酪農事情』第36巻第4号、1976年4月、70-71頁。
- 22) 橋本左五郎「練乳製造に就て」、『農事新報』第2巻第4号、1908年4月、15頁。
- 23) 高松正信「独逸の学生生活」、『日本之産馬』第4巻第3号、1914年3月、8-9頁。
- 24) 前掲『日本之産馬』第4巻第3号、15頁。
- 25) 前掲『日本之産馬』第4巻第3号、10頁。
- 26) 高野六郎「葛西勝彌君」、葛西勝彌博士追憶集刊行会編・発行『葛西勝彌博士追憶集』1951年、22頁。
- 27) 小華和忠士「嗚呼葛西勝彌先生」、前掲『葛西勝彌博士追憶集』、195-197頁。
- 28) 高橋栄治「故大島先生の研究業績」、『熱帯農学会誌』第6巻第3号、1934年11月、217-220頁。
- 29) 農芸化学第一講座の担任候補であった鈴木重礼助教授は、「退職者履歴資料」によると三重県肥料礦物調査や渡良瀬川沿岸鉍毒被害地含有銅分調査に従事した経歴があり、土壌学研究を期待されて東京帝国大学農科大学から招聘されたと思われる。
- 30) 前掲「名誉教授履歴書綴（一）」内の半澤洵の項を参照。
- 31) 拙稿「半澤洵、精巧なる筆致の世界」、『北海道大学150年史編集ニュース』第9号、2022年9月、3頁。高尾彰一『食卓の小さな巨人』微生物』（北海道新聞社、1997年）を参照。
- 32) 半澤洵旧蔵留学日誌（北海道大学大学文書館所蔵）。なお、半澤は、前掲「名誉教授履歴書綴（一）」によれば、1904年1月～3月、東京の国立伝染病研究所（所長：北里柴三郎博士）にて伝染病研究方法の講習を受講している。
- 33) 前掲「半澤洵、精巧なる筆致の世界」。池上重康「農学士半澤洵の欧州巡行と東北帝国大学農科大学応用菌学教室」（『日本建築学会大会学術講演梗概集（北海道）』2013年）を参照。
- 34) 1900年2月8日付「海外留学生ニ関スル件」（文部省専門学務局長宛て校長上申書）、『北大百年史』札幌農学校史料（二）、1981年、519頁。
- 35) 伊藤清蔵『南米に農牧三十年』、宮越太陽堂、1956年、78頁。
- 36) 件名「東北帝国大学農科大学助教授森本厚吉ノ外国留学ニ関スル上申ノ件」、前掲簿冊「外国留学生関係（二）東北帝国大学」に所載。
- 37) 「名誉教授称号授与関係書類（一）-1」（北海道大学大学文書館所蔵）内の中島九郎の項を参照。
- 38) 高岡の留学生活については、高岡熊雄回想録編集委員会編『時計台の鐘』（楡書房、1956年、62-94頁）に詳しい。
- 39) 前掲『南米に農牧三十年』92-94頁。
- 40) 森本厚吉伝刊行会編『森本厚吉』、河出書房、1956年、779頁。
- 41) 中島九郎「R.T. イーリ著「所有権および契約論」梗概」、『札幌短期大学論集』第4号、1958年5月、1頁。
- 42) 犬飼哲夫「故八田三郎先生略伝」、『動物学雑誌』48(7)、1936年7月、335頁。
- 43) 松村松年『松村松年自伝』、造形美術協会出版局、1960年、145・150-151頁。
- 44) 前掲『松村松年自伝』165頁。

- 45) 増田芳雄「坂村徹先生の植物生理学」、坂村徹先生の追想文集刊行会編『坂村徹先生の追想』、開成出版、1982年、20-21頁。
- 46) 田宮博「坂村先生と私」、前掲『坂村徹先生の追想』38頁。
- 47) 「退職者履歴資料 九 大正15年」(北海道大学大学文書館所蔵)内の小出房吉の項を参照。
- 48) 『北のヤシの木 歌オブナ林と新島善直の物語』、黒松内町、1993年、20頁。
- 49) 「退職者履歴資料 一 5 明治32~35」(北海道大学大学文書館所蔵)内の川江秀雄の項を参照。
- 50) 「退職者履歴資料 六 大正11~12」(北海道大学大学文書館所蔵)内の坂岡末太郎の項を参照。
- 51) 宮部金吾宛て野澤俊次郎書簡(1906年10月27日、11月29日付)及び藤田経信書簡(1906年11月27日付)。書簡は北海道大学大学文書館所蔵。
- 52) 板倉聖宣監修『事典日本の科学者—科学技術を築いた5000人』(日外アソシエーツ、2014年、496頁)、「退職者履歴資料 一〇 昭和2」(北海道大学大学文書館所蔵)内の田中館秀三の項を参照。
- 53) 井口賢三「葛西君との交遊の思出」、前掲『葛西勝彌博士追憶集』10頁。
- 54) 星野勇三が留学中に書き留めた研究手帳は「星野勇三関係資料」(北海道大学大学文書館所蔵)中に残されている。
- 55) 前掲『酪農事情』第36巻第4号、71頁。

〔後記〕本研究は、JSPS 科研費 JP21K02187の助成を受けたものである。

(やまもと みほこ／北海道大学大学文書館員)

【巻末一覧】

札幌農学校・東北帝国大学農科大学・北海道帝国大学農学部における文部省外国留学生一覧

氏名	学位（卒業）	身分（発令前→発令後）
留学期間（留学年限）		留学国 研究学科
留学先		
《農学教室の文部省外国留学生》		
時任一彦	農学士（本科1897年卒業）	札幌農学校助教授→教授（1905.11）、農科大学助教授・農芸物理学講座担任（1907.9）、教授（1911.4）
1901.9発令、1901.12着～1905.1帰国（満3ヶ年）		独、米（追加） 農芸物理学
星野勇三	農学士（本科1901年卒業）	札幌農学校助教授→教授（1907.4）、農科大学助教授・園芸学講座担任（1907.9）、教授（1911.4）
1903.7発令、1903.9出発～1907.3帰国（満3ヶ年）		独・仏・英・米 園芸学
【研究】 コロンビア大学、コーネル大学、ミズーリ植物園、ベルサイユの園芸学校、王立キューガーデン 【見学】 米国北部の農科大学、イリノイ州立大学、ミシガン農学校、オンタリオ農学校		
東海林力蔵	農学士（本科1901年卒業）	農科大学助教授（1907.9）→農学第四講座担任（1917.10）、農科大学教授（1918.4）
1912.12発令、1913.3出国～1915.6帰国（満2ヶ年）		英・独・米 農学
【研究】 ベルリン大学 【見学】 オックスフォード、ドイツ農会開催の博覧会、パリ、ダーレムの植物学教室、インドの熱帯植物		
明峰正夫	農学士（本科1899年卒業）、農学博士（1918）	農科大学助教授（1907.9）、農学第三講座担任（1917.10）→教授（1918.8）
1919.7発令、1920.1出発～1921.12帰学（満1ヶ年、1921.8迄延期）		米・英・仏・伊・瑞典、独（追加） 育種学
【研究】 Prof. Shull, Prof. Love, Prof. Gates 等に師事（遺伝学、生物測定学、細胞学を研究）		
《畜産学教室の文部省外国留学生》		
橋本左五郎	農学士（本科1889年卒業）	[札幌農学校助教授] →教授（1900.8）、農科大学助教授・畜産学講座担任（1907.9）
1895.5発令、1895.7出発～1900.6帰国（満3ヶ年）		独・仏 牧畜及畜産製造学
【研究】 ホーエンハイム農学校（畜産学、1895.6-1896.4）→ライプティヒ大学、ハレ大学農科大学（畜産学、1896.4-1900）、ハレ大学医科大学（細菌学、1898.5-1900） 【囑託】 泥炭地調査（北海道庁、1898）、畜産学実地取調（独・仏・英・米、1900.4-1900.6）		
小倉鉦太郎	獣医学士（帝国大学1895年卒業）	農科大学助教授（1909.6）→教授・獣医学第二講座担任（1911.7）
1909.6発令、1909.8着～1911.6帰国（満2ヶ年）		独・仏 獣医学及内科学
高松正信	農学士（本科1907年卒業）	農科大学助教授→教授・畜産学第二講座担任（1915.8）
1909.10発令、1910.1出国～1913.11帰国（満3ヶ年、延期6ヶ月）		独・普・米 畜産学
【研究】 ドレスデン高等獣医学校（牛学・畜産学）、ハレ大学農科大学（馬学・畜産学）		

葛西勝彌	獣医学士 (東京帝国大学1910年卒業)	農科大学助教授→家畜衛生学講座担任 (1921.4)、北海道帝国大学教授 (1924)
1917.6発令、1917.10出国～1921.4帰国 (満3ヶ年)		米・仏・英 家畜衛生学
【研究】 ロックフェラー医学研究所、ミシガン大学医学部 (細菌学教室)		
里正義	農学士 (農科大学1909年卒業)	農科大学助教授→皮革製造学講座担任 (1920.11)、北海道帝国大学教授 (1921.3)
1917.12発令、1918.3出發～1920.11帰国 (満2ヶ年半)		米・英・瑞西 畜産学及皮革製造学
【研究】 シラキュース大学		
《農芸化学教室の文部省外国留学生》		
大島金太郎	農学士 (本科1893年卒業)、農学博士 (1907)	[札幌農学校助教授] →教授 (1903.4)、農科大学教授・農芸化学第二講座担任 (1907.9)
1898.8発令、1898.8出發～1903.3帰国 (満3ヶ年、2ヶ年延期)		米・独 農芸化学
【研究】 ウェスレアン大学 (アトウォーター教授に師事、農芸化学・生理化学、1898.9～) →ハレ大学 (メルケル教授・キユーン教授・パウメルト教授に師事、農芸化学・食品化学、1899.10～) →ゲッティンゲン大学 (トーレンス教授・ライシュマン教授に師事、農芸化学・農芸細菌学、1900.4～) →ベルリン大学 (ザルコウスキ教授、ツンハ教授につき農芸化学・生理化学、1901.9～)		
【巡歴】 米国内の農学校・農事試験場等調査 (1899.8-1899.9)、英・仏国内の巡歴調査 (1900.5)、仏・英・白・和国内の農芸化学実験場・農学校・農事試験場等巡歴調査 (1900.7-1900.10)、独国内の農芸化学実験場・農事試験場等巡歴調査 (1901.4)		
【学会】 パリ第4回万国応用化学会農芸化学部会議に出席 (1900.7)、第19回米国農芸化学者会議・第16回米国農学校及農事試験場会議に出席 (1902.10)		
【嘱託】 米国農商務省技師 (營養事項研究主任アトウォーター教授と共に研究、1902.3～)		
吉井豊造 (1919.6.10没)	農芸化学士 (駒場農学校1885年卒業)	札幌農学校教授→農科大学教授 (1907.9)、農芸化学第一講座担任 (1908.12)、農産製造学講座担任 (1910.7)
1906.9発令、1906.10出国～1908.12帰国 (満2ヶ年)		独・仏・米 農産製造
半澤洵	農学士 (本科1901年卒業)、農学博士 (1915)	農科大学助教授→応用菌学講座担任 (1915.7)、教授 (1916.6)
1911.9発令、1911.12出国～1914.6帰国 (満2ヶ年)		独、仏・米 (追加) 応用菌学
【研究】 ハノーファー工科大学 (C. ウェーマー教授に師事、醗酵菌類研究、1912.1-1912.9) →ライプティヒ大学農科大学 (1913.10-1914.3) →パスツール研究所 (細菌学・生化学、1912.9-1913.9)		
【巡歴】 植物病理学・細菌学研究に関する諸施設を調査 (仏・独・伊・瑞西・盧森堡・奥太利・露・芬蘭・丁抹、1913.8-1913.10)		
鈴木重礼 (1914.3.1没)	農学士 (東京帝国大学1900年卒業)、農学博士 (1907)	農科大学助教授→教授・農芸化学第一講座担任 (1911.6)
1908.3発令、1908.3出發～1911.6帰国 (満3ヶ年)		独・仏・米 農芸化学
三宅康次	農学士 (本科1905年卒業)、農学博士 (1915)	農科大学助教授、農芸化学第三講座担任 (1910.7) →農芸化学第一講座担任 (1917.9)、教授 (1918.8)
1914.6発令、1914.11出国～1917.8帰国 (満3ヶ年)		英・米 農芸化学
田所哲太郎	農学士 (農科大学1910年卒業)、農学博士 (1919)	農科大学助教授→北海道帝国大学教授・農芸化学第三講座担任 (1921.3)
1918.7発令、1918.10着～1920.11帰学 (満2ヶ年)		米・英・仏 生物化学

逸見文雄	農学士(農科大学1913年卒業)、 農学博士(1919)	農科大学助教授→農産製造学講座担任(1923.3)、 北海道帝国大学教授(1923.12)
1920.9発令、1921.1出国→1923.3帰国(満2ヶ年)	英・米・独、仏・伊(追加)	農産製造学
《農業経済教室の文部省外国留学生》		
高岡熊雄	農学士(農学科1895年卒業)	札幌農学校助教授→教授(1905.12)、農科大学教授・ 農政学殖民法講座担任(1907.9)
1900.6発令、1901.2出発～1904.12帰国(満3ヶ年)	独	農業経済及農政
【研究】ボン大学及びポッペルスドルフ高等農学校(経済学・農政学、1901.4-1901.8)→ベルリン大学(農政学・経済学・殖民政策、1902.9-1904.8) 【巡歴】露西亜、瑞典、丁抹、独逸、瑞西、伊太利、奥太利、匈牙利、仏蘭西、白耳義、和蘭、北米 【囑託】独逸拓殖事項調査(北海道庁、1901.12-1902.3)、仏国農工業調査(北海道庁、1902.1-1902.3)		
伊藤清蔵	農学士(本科1900年卒業)	札幌農学校助教授→盛岡高等農林学校教授(1906.7)
1902.8発令、1902.12出発～1906.6帰国(満3ヶ年、1906.4迄延期)	独・仏	農学
【研究】ボン大学(ゴルツ教授の農業史・農政学・農業経営学)、ハレ大学(経済学)、コーネル大学(農業経済教室で日本農業と北米農業の差異を語る) 【視察】メキシコ西北部のヤーキイ河畔平野の植民予定地		
森本厚吉	農学士(農学科1901年卒業)、 Ph.D.(1916)	農科大学助教授(1908.6)、経済学財政学講座担任 (1915.7)→教授(1918.8)
1915.9発令、1915.10出国～1918.4帰国(満2ヶ年、1918.2迄延期)	米	経済学財政学
【研究】ジョンズ・ホプキンス大学大学院(Fellow by courtesyとして経済学研究)		
中島九郎	農学士(農科大学1910年卒業)、 農学博士(1922)	農科大学助教授(1912.8)、農学第二講座担任(1919.4) →北海道帝国大学教授(1922.11)
1919.7発令、1919.12出国～1922.3帰国(満2ヶ年、1922.2迄延期)	米・英・仏	農業経済学
【研究】ウイスコンシン大学(R.T.イリー教授に師事)		
《昆虫学教室の文部省外国留学生》		
松村松年	農学士(農学科1895年卒業)、 理学博士(1903)	札幌農学校助教授→教授(1902.12)、農科大学教授・ 動物学昆虫学養蚕学第二講座担任(1907.9)
1899.5発令、1899.8出国～1902.10帰国(満3ヶ年)	独、匈牙利・伊(追加)	農学(主トシテ害虫駆除法益虫保護法及養蜂論)
【研究】ベルリン大学(カルシュ教授F. Karschの「昆虫分類学」、シュルチ教授の「普通動物学」、コルベ教授の「独乙甲虫論」、ハイモンス教授の「昆虫学ニ関スル実験法」、クルカツ博士の「浮塵子分類法」、1899.10～1901.4)→ハンガリー国立博物館(ホルバート博士のもとで「浮塵子」を研究、1901.4～) 【学会】第五回世界動物学会に出席(1901.8) 【旅行】イタリア、アフリカ		
《動物学教室の文部省外国留学生》		
八田三郎	理学士(帝国大学1892年撰科 修了)、理学博士(1908)	農科大学助教授・動物学昆虫学養蚕学第一講座担任 (1907.7)、教授(1908.10)
1912.10発令、1912.12出国～1915.3帰国(満2ヶ年)	英・仏・独	動物学
【研究】ベルリン大学(動物発生学、ヤツメの研究) 【見学】ホーエンハイム大学		

《植物学教室の文部省外国留学生》			
郡場寛	理学士（東京帝国大学1907年卒業）、理学博士（1912）	農科大学教授・植物学第二講座担任（1915.8）→京都帝国大学教授（1920.8）	
1918.2発令、1918.3出国～1920.8帰国（満2ヶ年）		米・英・伊・瑞西、仏（追加）	植物学
【研究】 ライプティヒ大学			
坂村徹	農学士（農科大学1913年卒業）、理学博士（1920）	[大学院特選給費学生]→農科大学助教授（1918.11）、植物学第二講座担任（1921.3）、北海道帝国大学教授（1921.12）	
1918.8発令、1918.12出国～1921.3帰国（満2ヶ年）		米・英・瑞西、丁抹・瑞典（追加）	植物生理学
【研究】 ハーバード大学（オスターハウト教授に師事）、ベルン大学（アッシャー教授に師事）			
《土木工学科の文部省外国留学生》			
川江秀雄(秀夫)	工学士（工学科1895年卒業）、C.E.（1897）	[技師（ホーエンツォルレン州）]→札幌農学校土木工学科教授（1900.11）、土木工学科主任（1901.8）	
1897.10発令、[私費渡独]～1900.9帰国（満1ヶ年）		独	土木工学
水利工学の实地研究（スツットガルト市1897.12～）、巡歴研究（独・墺・白耳義・伊・瑞西・仏・匈牙利・和蘭・英等、1898.8-1899.6）、技師（米・エッジモア橋梁会社、1899.8-1900.3）、パリ万国大博覧会視察（1900.4～）			
坂岡末太郎	工学士（工学科1894年卒業）	農科大学土木工学科教授・主任（1907.9）	
1908.9発令、1908.10出国～1910.7帰国（満2ヶ年、1910.6迄短縮）		英・米・独・仏	土木工学
《林学教室の文部省外国留学生》			
新島善直	林学士（帝国大学1896年卒業）、林学博士（1909）	札幌農学校教授→農科大学林学科教授（1909.9）、農科大学教授・林学第二講座担任（1910.8）	
1905.11発令、1906.1出国～1908.6帰国（満2ヶ年）		独	造林学及保護学
【研究】 ギーセン大学（ヘッス教授に師事、造林学・森林保護学）			
宍戸乙熊	林学士（東京帝国大学1902年卒業）	農科大学林学科教授（1907.9）→農科大学助教授（1910.8）、教授・林政学及森林管理学講座担任（1913.8）	
1909.12発令、1910.2出発～1912.7帰国（満3ヶ年、約3ヶ月延期）		独、米（追加）	林政学
宮井健吉	林学士（東京帝国大学1905年卒業）	農科大学林学科教授→農科大学助教授（1910.8）、林学第三講座担任（1913.7）、教授（1915.8）	
1909.10発令、1910.1出国～1913.4帰国（満3ヶ年）		独	森林利用学
《水産学科の文部省外国留学生》			
鈴木寧	農学士（本科1905年卒業）	[北海道庁水産学校教諭]、札幌農学校助教授（1906.7）→農科大学水産学科助教授（1907.9）、水産学科教授（1909.9）	
1906.9発令、1906.10出国～1909.8帰国（満2ヶ年）		独・仏・米	水産製造
野澤俊次郎	農学士（本科1885年卒業）	札幌農学校教授兼北海道庁技師（1906.10）→農科大学水産学科教授（1907.9）	

1906.10発令、1906.11出国～1909.2帰国（満2ヶ年）		独・仏・米、英（追加）	水産漁撈
藤田経信	農学士（本科1889年卒業）、理学士（帝国大学1892年卒業）	[農商務省水産講習所技師]、札幌農学校教授（1906.7）→農科大学水産学科教授（1907.9）、水産学科主任（1908.10）	
1907.1発令、1907.3出国～1908.10帰国（満1ヶ年、4ヶ月延期）		英・独	水産養殖
下斗米秀三	理学士（東京帝国大学1908年卒業）	農科大学水産学科教授兼農科大学助教授	
1910.2発令、1910.3出発～1915.12帰国（満3ヶ年）		英・独	地理学及海洋学
【研究】 ヴェスヴィオ火山の研究			
遠藤吉三郎	理学士（東京帝国大学1901年卒業）、理学博士（1908）	札幌農学校教授（1907.4）、農科大学水産学科教授（1907.9）	
1911.9発令、1911.12出国～1914.3帰国（満2ヶ年）		独・英・諾威	水産植物学及浮遊生物学
【調査】 各地の海藻標本腊葉庫を視察・標本精査 【交遊】 ノルウェーで植物学者ウイル（J. N. F. Wille）、グラン博士（H. H. Gran）、フォスリー（M. Foslie）等			
村山佐太郎	水産学科1910年卒業	水産学科助教授→附属水産専門部助教授（1918.4）、同教授（1920.1）	
1917.3発令、1917.4出国～1919.10帰国（満2ヶ年、1919.7迄延期）		米・英・諾威	漁撈
西村眞琴	広島高等師範学校博物学科1908年卒業、PhD.（1920）	[南満医学堂教授]→附属水産専門部講師（1921.7）、附属水産専門部教授（1921.10）	
1920.7発令、[私費留学、コロンビア大学]～1921.10帰国（1年2ヶ月）		米・瑞典・諾威	水産植物学及浮遊生物学
《大学予科の文部省外国留学生》			
大井上義近	理学士（東京帝国大学1904年卒業）	大学予科教授兼農科大学助教授兼鑛務技師→大学予科教授兼北海道帝国大学助教授（1918.4）	
1915.3発令、1915.3出国～1917.5帰国（満2ヶ年）		米	岩石学

注) 文部省専門学務局『文部省外国留学生表』、「退職者履歴資料」・「名誉教授履歴書綴」（北海道大学大学文書館所蔵）より作成し、本文注の文献・資料のほか、木原均・篠遠喜人・磯野直秀監修『近代日本生物学者小伝』（平河出版社、1988年）、長尾正人「農学博士明峰正夫先生育種学上業績の概略」（『農学論叢』養賢堂、1938年、259頁）等により補った。なお、留学前後の博士号の取得、私費留学、前職等も追記した。